柮出版『浪漫飛行』創刊号原稿

「不易」と「流行」を超克する人生の旅路

伊藤　洋

「・・・弥生に至り、待ち侘び候塩釜の桜、松島の朧月、安積の沼のかつみ葺く頃より北の国にめぐり、秋の初め、冬までには、美濃・尾張へ出で候。（中略）水上の泡消えん日迄の命も心忙しく、去年の旅より魚類肴味口に払い捨て、一鉢の境涯、乞食の身こそ尊けれとうたいに侘し貴僧の跡もなつかしく、なお今年の旅はやつしやつして薦を被るべき心がけにて御座候。」。元禄 2 年早春、芭蕉が書いた郷里の門弟猿雖宛書簡の一部である。『笈の小文』・『更科紀行』の旅から帰って以来肉食を断ち、増賀上人にならって、いよいよ薦をかぶる覚悟で『奥の細道』の旅に参ります、と言うのである。この旅にかける芭蕉の並々ならぬ決意が伝わってくる。

この時、芭蕉はすでに 45 歳。人生 50 年時代のことだから、現在の平均寿命で換算すれば 70 歳にはなろう。にもかかわらず、俳諧革新のために、未経験のみちのくを目指した。そのターゲットは、「不易」の象徴たる歌枕の跡を辿ることであった。

だが、この旅で芭蕉が見たものは、「不易」などはどこにも無く、歴史の藻屑と消え失せてしまった過酷な現実であった。上記書簡にもあった安積の沼。「いづれの草を花かつみとは云ぞと、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋、人にとひ、『かつみかつみ』と尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ」というありさまである。歌枕の主題である花かつみを土地の人が見たことすらないという。すべては「諸行無常」、これこそが現実の姿なのだ。

ところが、多賀城に来て事態は一変する。あの「壺碑」があったのである。「むかしよりよみ置る歌枕、おほく語伝ふといへども、山崩川流て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り、代変じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、 羇旅の労をわすれて、泪も落るばかり也」。芭蕉はここに至って、「不易」の存在を確信した。

俳諧革新としての「流行」と、永遠へとつながる「不易」。この矛盾する二つを超克する人生の旅路、それが俳聖芭蕉の『奥の細道』だったのである。

読者の皆さんの、「えんぴつ」でする『奥の細道』への旅路の安全を祈ります。